

理事長 寶 馨 たから かおる

**観** 測によって1時間雨量50mmという「データ」が得られます。この雨量が1時間の間に降ったという「情報」が分かれば、強い雨なので浸水害の危険性があるという「知識」が役に立ちます。車の運転手は、浸水しそうな道路を避けて目的地へ向かうという「知恵」を働かせ災害を回避します。

「情報」とは単なるデータではなく、意味を持つデータであり、それにより適切な判断が可能になります。こうした情報を整理し体系化したものが「知識」です。学校や講演会・研修会などでさまざまな知識を学びますが、その知識は、生活のための「知恵」となるのです。

防災科研は、観測や実験の結果、研究の成果を「情報プロダクト」として公表し、社会の防災力の向上、レジリエントな社会の構築に貢献しています。情報プロダクトというとき、上記の「データ」「情報」「知識」、さらには「知恵」までも含むものと考えられます。

辞書によれば、「情報」とは、「事情」を「報告」することから一字ずつ抜き出してできた略語だそうです。20世紀の初頭には使われ始め、その後英語informationの訳語として定着してきました。① 物事の内容・様子、また、その知らせ、② 適切な判断を下すため、行動の意思決定をするために役立つ資料や知識、③ 機械系や生体系に与えられる指令や信号、などがあります。「情報プロダクト」の「情報」は、この②に相当するものと考えられます。

防災科研は、全国的な地震津波火山の観測ネットワークMOWLASで大量の観測データを収集・配信し、世界トップレベルの実験施設を用いて、

先進的な実験データを蓄積しています。これらの観測・実験データのみならず、災害現場で収集・分析された多種多様な情報をSIP4Dによって組織横断的に共有し、また、防災クロスビューで公開しています。

このように、防災科研が発信・蓄積している「情報」は、社会の安全を支える知識や知恵として生かされています。これらの情報は、災害の「予測・予防」から「応急対応」、「復旧・復興」に至るまで、さまざまな段階で重要な役割を果たしています。

2024年元日の能登半島地震から2年がたちました。その後も、各地で自然災害は次々と発生しています。防災科研はこれからもあらゆる自然災害に対するすべての過程において、より効果的な情報のあり方・扱い方をさらに考究してまいります。

本号では、災害情報や防災情報に関して、防災科研が進める次なる展開を社会防災研究領域のメンバーが解説いたします。



情報を生かす防災科研の次なる展開